

コピュラ文に出現する代名詞要素

ー アラビア語・ヘブライ語・ロシア語・ポーランド語の場合 ー

広島大学大学院 広島大学
永野 隆童 上野 貴史

1. はじめに

どの言語にも、例えば、(1)のような日本語の「Aは/がBだ」や、(2)の英語の“A is B”のような形式でのコピュラ文が存在する。

- (1) 太郎は / が学生だ。
- (2) John is a student.

言語によっては、(3)のイタリア語のような代名詞主語の省略や、(4)のアラビア語のようなコピュラ動詞が明示されないものも見られるが、一般的にコピュラ文を構成する要素は「主語」, 「コピュラ」, 「述語」である。

- (3) Sono il presidente
am the president
「私は大統領です」 (Camacho 2013: 71)
- (4) muḥammadun taalibun
Muhammad student
「ムハンマドは学生です」 (竹田 2013: 60)

このような主要な構成要素以外にも、コピュラ文には(5)のヘブライ語の *hu* や(6)のポーランド語の *to* のような「代名詞要素 (以下 PE(pronominal element) と呼ぶ)」が出現することがある。

- (5) Aviv *hu* xaver Seli
Aviv he friend my
「アヴィヴは私の友人です」 (Shirtz 2014: 16)

(6) Marek *to* dobry lekarz.

Marek this good doctor

「マレックは良い医者です」

(Bondaruk 2012: 52)

このような PE はある特定のコンピュータ文で出現するものであるが、その出現要因や機能については明確に説明し切れていないというのが現状である。その理由の一つとしては、個別言語ごとに PE の振る舞いが大きく異なり、体系化するのが困難であるということが挙げられる。しかし、各言語における PE の特徴や振る舞いを相対化することによって、PE の本質的な機能、つまりどの言語にも当てはまる原理となるようなものを見出す手がかりとなるのではないかと考える。

本稿では、なぜ PE が本来の代名詞と異なる用法としてコンピュータ文に出現するのか、またコンピュータ文に出現する PE にはどのような機能があるのかについての手がかりを「アラビア語」、「ヘブライ語」、「ロシア語」、「ポーランド語」の4つの言語から探っていく。コンピュータ文に現れる PE についての分析のきっかけとして、これらの言語における PE の振る舞いからその実態を示すことが本稿の目的となる。

2. コンピュータ文のタイプ

PE は、アラビア語の(7)の *huwa/hiya* のように、コンピュータ文の中でもある特定の文構造を持つ時に出現する。

(7) a. Zaydun (**huwa*) taalibun

Zayd (*PE) student

「ザイドは学生です」

(Alharbi 2020:21)

b. 'al-maliku (*huwa*) Zaydun

the-king (PE) Zayd

「この王様がザイドです」

(Alharbi 2020:21)

c. Michel Chalhoub *(*huwa*) Omaru s-shariif

Michel Chalhoub *(PE) Omaru the-sariif

「マイケルシャルホブはオマルシャリーフです」

(Alharbi 2020:21)

d. haadhi l-bintu (*hiya*) Hindunthis the-girl_{NOM} (PE) Hind_{NOM}

「この女の子はヒンドです」

(Alharbi 2020:25)

(7a)においては、PEである *huwa* が出現すると非文法的になる一方で、(7b/d)においては、PEである *huwa/hiya* の出現が任意である。また、(7c)では、PEである *huwa* が義務的に出現する。このようなPEの出現の可否を考える上で、Higgins (1973) によるコンピュータ文の分類が有用であると考えられる。

Higgins (1973) では、コンピュータ文の主語 (Subject) と述語 (Predicate) の構造からコンピュータ文を〈表1〉のように分類している。

〈表1: コンピューラ文の主語—述語構造 (Higgins 1973: 246)〉

Type	subject	Predicate
Predicational	Referential	Predicational
Specificational	Superscriptional	Specificational
Identity	Referential	Referential
Identificational	Referential	Identificational

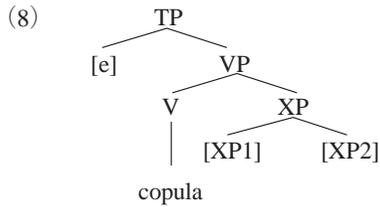
例えば先述の(7a)は、このHiggins (1973) の措定文 (Predicational) のタイプに当てはまる。(7a)では、主語にある対象を指示する指示的 (Referential) 名詞句 *Zaydun* が置かれ、述語には主語 *Zaydun* の属性を叙述 (Predicational) する要素である *taalibun* が置かれている。続く(7b)は主語の属性を指定する文である指定文 (Specificational) であり、主語にはリストの見出しとしての役割を果たす非指示的 (Superscriptional) 名詞句 '*al-maliku*、述語にはリストの項目となる指示的 (Specificational) 名詞句 *Zaydun* が出現している。(7c)は主語と述語が意味的、機能的に同等なものを指す文である同一性文 (Identity) に該当し、主語 *Michel Chalhoub* と述語 *Omaru s-shariif* の両方に指示的名詞句が置かれ、一人の人物が異なる二つの名前を持つことを意味している。(7d)は人やものの名前を識別する文である同定文 (Identificational) と呼ばれるコンピュータ文で、主語には代名詞、もしくは代名詞を含んだ名詞句 ((7d)では *haadhi l-bintu* という指示代名詞を含んだ指示的名詞句)、述語には主語を識別する人やものの名前 *Hindun* が置かれている。

(7)におけるPEの出現とコンピュータ文のタイプを見る限り、アラビア語では措定文においてPEは現れることができず、指定文と同定文においてはPEの出現が任意、同一性文では義務的であることが分かる。このように、コンピュータ文のタイプとPEの出現には深い関連性があるということが窺える。

次節では、コンピュータ文でPEの出現が確認されるセム語派である「アラビア語」と「ヘブライ語」、スラブ語派である「ロシア語」と「ポーランド語」におけるコンピュータ文を概観するとともに、PEが出現するコンピュータ文のタイプを考察する。

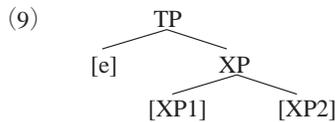
3. 各言語におけるコピュラ文と PE

各言語におけるコピュラ文に出現する PE を考察する前に、コピュラ文の統語構造について概観してみる。Heggie (1988) は、全てのコピュラ文は基底構造において、(8)のような小節構造を有すると分析している。



(Heggie 1988: 122, 一部改変)

(8)は、コピュラ文に関して、Vにあるコピュラが〈主語 (XP1) —述語 (XP2)〉という小節 (Small Clause) を補部にとるということを示している。このような構造では、顕在的に現れるコピュラがVP主要部に位置することになる。しかし、アラビア語などのように現在時制において明示的なコピュラが現れない場合には、TP主要部のTが小節を補部にとる(9)のような構造を取り入れる必要がある (Baker & Baker 2003, Benmamoun 2008, Shlonsky & Rizzi 2018)。



次に、コピュラ文を小節構造として捉えるこのような基底構造を基本として、これから派生される各言語のコピュラ文の「時制」, 「一致」, 「XP2の格」などの特徴を概観すると共に、これらがPEの出現とどう関係しているかについて見ていくことにする。

3.1. アラビア語

アラビア語における現在形のコピュラ文は、コピュラが明示されない(10)のような〈主語—述語〉をそのまま並べるゼロコピュラ文として示される。

- (10) a-sshaabb-un taalib-un
 the-youth_{SG.M-NOM} student_{SG.M-NOM}
 「その青年は学生です。」

(八木 2013: 40)

アラビア語には、文頭に置かれる主語は意味上限定されていなければならないという制約があり、コピュラ文の主語に不定名詞句を置くことができない。その主語にはゼロコピュラ文では(10)のように *a-sshaabb-un* という主格が出現し、この場合、述語も *taalib-un* という主格が現れる。

これに対して、アラビア語においては、過去 / 未来を示すコピュラ文ではコピュラ *kaana/yakuunu* が現れる。

- (11) *kaana l-ttaalib-u mujtahid-an*
 was_{3.SG.M} the-student_{SG.M-NOM} diligent_{SG.M-ACC}
 「その学生は勤勉でした。」 (八木 2013: 186)

- (12) *sayakuunu l-sshaabb-u qaabiş-an*
 will-be_{3.SG.M} the-youth_{SG.M-NOM} officer_{SG.M-ACC}
 「その青年は士官になるでしょう。」 (八木 2013: 186)

過去を示すコピュラ文では(11)のようにコピュラとして *kaana* が用いられ、未来を示すコピュラ文では(12)のように *sayakuunu* が用いられる。またアラビア語の基本語順が VS であることから、(11)、(12)で示したようにコピュラ *kaana/yakuunu* は主語に先行して現れるのが一般的である。このようにアラビア語においては、VP の主要部に明示的なコピュラが出現する過去形・未来形のコピュラ文では、XP2 に対格が付与されるのに対し、明示的なコピュラが出現しない現在形では、格が付与されず、デフォルトの主格で示される。

このようなアラビア語におけるコピュラ文の基底構造を一般化して記述すると(13)のようになる。

- (13) [TP [VP *kaana/yakuunu* [SC XP1 XP2]]]

(14)はこの基底構造で出現している過去形のコピュラ文である。

- (14) *kaana hawulaa'i l-muwazzaf-uuna mashfuul-iina*
 was_{3.SG.M} these the-employee_{PLM-NOM} busy_{PLM-ACC}
 「この職員たちは忙しかったです。」 (竹田 2013: 61)

主語と動詞の一致に着目すると、(14)では、動詞 *kaana* は主語である *hawulaa'i l-muwazzaf-uuna* の三人称・男性という素性に一致するが、数の一致は見られない。しかし、XP1が動詞の前に移動した(15)においては、動詞 *kaanu* は移動した主語である *hawulaa'i l-muwazzaf-*

uuna の三人称・男性という素性に加えて複数という数の素性にも一致する。

- (15) *hawulaa`i l-muwazzaf-uuna kaanuu mashfuul-iina*
 these the-employee_{PLM-NOM} was_{3.PL.M} busy_{PLM-ACC}
 「この職員たちは忙しかったです。」 (竹田 2013: 61)

このことから、アラビア語においては、数の素性が移動によって引き起こされるということが言える¹⁾。また、このような前置される主語は、topic としての解釈を受ける (Alazzawie, 2016, Alotaibi 2018, Jouini 2019) ことから、数の一致は話題化によって引き起こされるということも言える。

以上のようなコピュラの有無による XP2 に対する格付与や、XP1 の移動による動詞の一致に特徴が見られるアラビア語のコピュラ文であるが、次に、このようなコピュラ文における PE²⁾ の出現について見ていく。

アラビア語において、PE は XP1 と XP2 の間に生じ、XP1 の性と数に一致する。

- (16) *'anaa huwa /*hiya l-muṣkilatu*
 I_{SG.M} PE_{SG.M} /* PE_{SG.F} the-problem_{SG.F}
 「私が問題です」 (Alharbi 2020: 30-31)

(16) では主語 *'anna* の単数・男性という素性と、PE である *huwa* [単数・男性] が一致している。

最後に、アラビア語の PE は、第 2 節で見たように、同一性文において義務的に出現し、指定文・同定文で随意的に現れる。措定文に関しては、(17) のように、*huwa* が出現すると非文法的となる。

- (17) **kaana 'ahmadu huwa tabiiban*
 was Ahmad PE doctor
 「アシュマドは医者でした」 (Alotaibi 2018: 118)

¹⁾ このことは、XP2 が文頭に出現する指定文の場合にも当てはまる。

i) *sabab-u l-umshkilat-i kaana t-tullaab-a*
 cause_{3.SG.M} the-problem was_{3.SG.M} the-student_{PL.M}
 「問題の原因は生徒たちであった」 (Alharbi 2017: 93)

i) のコピュラ *kaana* は、文頭に移動した XP2 である *sababu* の三人称・単数・男性という素性と一致する。

²⁾ アラビア語における PE は *huwa* “he/it” などの三人称の人称代名詞が用いられる。

アラビア語において、現在形のコピュラ文ではコピュラが明示されず、過去形や未来形のコピュラ文においてはコピュラが明示される。このコピュラの有無によって述語の格に違いが見られ、コピュラが明示されない節の述語は主格で現れるのに対し、コピュラが明示される節の述語は対格で現れる。また、アラビア語のコピュラは基本語順の VS では主語の人称・性との一致を示し、XP1が動詞の前に移動する SV 語順では主語の人称・数・性との一致を示す。このようなアラビア語のコピュラ文において、PE は主語と述語の間に出現する。このアラビア語の PE は、主語の数・性との一致を示し、コピュラ文のタイプによって出現に制限が見られる。措定文において PE の出現は容認されず、同一性文では義務的に現れ、指定文・同定文においては任意的に現れる。

3.2. ヘブライ語

ヘブライ語³⁾における現在形のコピュラ文では、明示的なコピュラは用いられない。

(18) dani more /nexmad

dani_{SG,M} teacher_{SG,M}/nice_{SG,M}

「ダニは先生です / 優しい」

(Haugereid, et al. 2013: 70)

一方、過去形・未来形では、アラビア語と同様、明示的なコピュラ⁴⁾が出現する。

(19) a. dina hayta mora /nexmada

dina_F was_{3,SGF} teacher_{3,SGF}/nice_{SGF}

「ディナは先生でした / 優しかった」

b. dani ve-dina yihiyu morim /nexmadim

(Haugereid, et al. 2013: 70)

dani_M and dina_F will-be_{3,PLM} teacher_{PLM}/nice_{PLM}

「ダニとディナは先生になるでしょう / 優しくなるでしょう」

過去形のコピュラ文である (19a) では、主語 *dina* とコピュラ *hayta* が人称・数・性において一致している。同様に、未来形のコピュラ文である (19b) においても、主語 *dani ve-dina* とコピュラ *yihiyu* が ϕ 素性において一致している。このように、ヘブライ語においては、(20) に示す基底構造から XP1 が繰り上がることによってコピュラ文が生成されるため、数における一致も基本的に見られる。

³⁾ 現代ヘブライ語では名詞の格が消失している。

⁴⁾ ヘブライ語のコピュラは *h.y.y.* という動詞語根からなる。

(20) [TP [VP *h.y.y* [SC XP1 XP2]]] → [TP XP1 [VP *h.y.y* [SC ~~XP1~~ XP2]]]

このようなコピュラ構造のある環境で PE が出現する訳であるが、ヘブライ語にはその PE に 2 種類の型が存在するとされる。まず、人称代名詞の *hu*.SG.M, *hi*.SG.F, *hem*.PL.M, *hen*.PL.F が PE として使用される「H 型 PE」というものがある。

(21) *rina hi talmida /xaxama/ba-bayit /xavera seli/giveret kohen* (Shirtz 2014: 20)
Rina_F PE(H)_{.SG.F} student/smart /at-the-home/friend my /Mrs. Cohen
 「リナは学生です / 賢い / 家にいます / 私の友人です / コヘンさんです」

(21)では、H 型 PE である *hi* が XP1 と XP2 の間に出現している。このような H 型 PE が出現する XP2 には DP/AP/PP の全ての範疇が出現可能である (Shirtz 2014)。また、一致に関しては、主語との一致を示す。

次に、指示代名詞 *ze*.SG.M, *zot*.SG.F, *ele*.PL を PE として使用する「Z 型 PE」というものがある。

(22) *rina zot talmida /*xaxama/*ba-bayit /xavera seli/giveret kohen* (Shirtz 2014: 20)
Rina_F PE(Z)_{.F.SG} student /smart /at-the-home/friend my /Mrs. Cohen
 「リナは学生です / 賢い / 家にいます / 私の友人です / コヘンさんです」

「Z 型 PE」は、「H 型 PE」とは異なり、(22)のように XP2 に AP/PP を置くことができないという制約がある。また、「H 型 PE」と違って、一致は XP2 と行われる。

(23) *ha-parcufim sela *ele /ze /zot bdixa*
*the-faces_{.PL.M} her *PE(H)_{.PL}/PE(Z)_{.SG.M}/PE(Z)_{.SG.F} joke_{.SG.F}*
 「彼女の顔は笑い種だ」 (Shirtz 2014: 19)

(23)における PE である *zot* の女性単数という素性は、XP2 の *bdixa* に一致する。これとは別に、「Z 型 PE」には、(23)で *ze* が許容されているように、いかなる一致も示さない *ze*.3.SG.M というデフォルト形態で使用される「非一致 Z 型 PE」といものがある。このように、「Z 型 PE」は XP2 との一致を示す一方で、「H 型 PE」は先述したように XP1 との一致を示す。これらの違いについて、Heller (2002) をはじめとした多くの先行研究において、「H 型 PE」は、主語の属性を表す場合に用いられ、「Z 型 PE」は主語と述語の同一性を表すために用いられると分析されている。

このような「H 型 PE」と「Z 型 PE」の違いは、コピュラとの共起についても見られる。

- (24) a. af proyekt Selo *ze* lo (*haya*) haclaxa
 no Project his PE(Z) neg (was) success
 「彼のプロジェクトは成功しなかった」
- b. af proyekt Selo *hu* lo (**haya*) haclaxa
 no project his PE(H) neg (**was*) success
 「彼のプロジェクトは成功しなかった」 (Shirtz 2014: 68)

基本的に、PEは移動したXP1の直後に現れるが、(24)で示したように、Z型で共起できるが、H型では容認されない。ヘブライ語における「H型PE」と「Z型PE」に関する問題には、多くの未だ明確に説明ができないような事象もあるが、本稿では一致とコピュラとの共起についての特徴を述べるに留める。

このような「H型PE」⁵⁾の出現とコピュラ文のタイプとがどのような関係にあるかを以下の例で考えてみる。

- (25) a. dani (*hu*) nexmad/rofe/ al ha-gag
 Dani (PE) nice/ doctor/on the-roof
 「ダニは優しい/医者です/屋根の上にいる」 [措定文] (Shirtz 2014: 30)
- b. ha-more **(hu)* dani
 the-teacher **(PE)* Dani
 「この先生がダニです」 [指定文] (Doron 1983: 115)
- c. dani **(hu)* mar kohen
 Dani **(PE)* Mr. Cohen
 「ダニはコヘンさんです」 [同一性文] (Shirtz 2014: 30)
- d. ze (*hu*) dani
 this (PE) Dani
 「これはダニです」 [同定文] (Doron 1983: 123)

(25a)で示したように、措定文においてH型PEの出現は任意であるとされる。続く(25b/c)の指定文・同一性文では、「H型PE」の出現が義務的となる。また、(25d)のような同定文では、「H型PE」が任意的に現れるとされる。

ヘブライ語では、現在形のコピュラ文ではコピュラが明示されず、過去形・未来形ではXP1とXP2の間にコピュラが現れ、主語の人称・数・性との一一致を示す。このようなコピュ

⁵⁾ 「Z型PE」とコピュラ文のタイプとの関係については、データが確認できなかったため、今後の課題となる。

ラ文には、ヘブライ語では人称代名詞の「H型 PE」⁶⁾と、指示代名詞の「Z型 PE」の2種類が存在する。この2種類のPEには統語的な違いがいくつかある。まず一致に関して、「H型 PE」は主語との一致を示すが、「Z型 PE」は述語との一致を示す。また、それぞれの節のXP2の範疇にも制限が見られ、「H型 PE」のXP2にはDP/AP/PPが出現可能である一方で、「Z型 PE」におけるXP2にはAP/PPを置くことができない。さらに、「H型 PE」はコンピュータと共起できないが、「Z型 PE」はコンピュータとの共起が可能であるとされる。最後に、「H型 PE」の出現環境について見たが、指定文・同定文においてPEの出現は任意的であるが、指定文・同一性文ではPEの出現が義務的であることを見た。

3.3. ロシア語

ロシア語における現在形のコピュラ文は、明示的なコンピュータを用いないゼロコピュラ文で示され、この場合、XP2に主格が現れる。

(26) Ivan vysokij/lučšij tancor.

Ivan tall.NOM/best dancer.NOM

「イヴァンは背が高い／最高のダンサーです」

(Geist 2008: 83)

また、過去形・未来形を示すコピュラ文では、コンピュータ *byl/budyet* が義務的に用いられる。

(27) a. Dima byl doctor /doctor-om

Dima.SG.M was.SG.M doxtor.NOM/doctor.INST

「デイマは医者でした」

b. Dima budyet pisatel-em

Dima.SG.M will-be.3.SG writer.INST

「デイマは作家になるでしょう」

(Markman 2008: 366)

まず、(27a)の過去形のコピュラ文であるが、ロシア語の過去形 *byl* は主語 *Dima* の単数・男

⁶⁾ ヘブライ語では主語が人称代名詞の場合、「H型 PE」を用いると非文法的であると判断される。

i) ata (**hu*) more

you (*PE(H)) teacher

「あなたは先生だ」

(Doron 1983: 96)

ii) を倒置文にした ii) のような文も非文法的となる。

ii) more (**hu*) ata

teacher (*PE(H)) you

「先生があなたです」

(Doron 1983: 96-97)

性という素性に一致している⁷⁾。この場合の XP2 には、基本的に具格 *doctorom* が現れるが、主格 *doctor* との交替が見られる場合がある⁸⁾。また、未来形⁹⁾のコピュラ文である (27b) では、コピュラ *budyet* が主語 *Dima* の三人称・単数という素性に一致し、XP2 に具格が現れる。このように、ロシア語では VP の主要部 V に明示的に出現するコピュラが XP2 に対格を付与し、XP1 が TP に移動することにより、人称・数・性の一致が生じると考えられる。この繰り上げを一般的に記述したものが⁸⁾(28)となる。

(28) [TP [VP *byl /budyet* [SC XP1 XP2]]] → [TP XP1 [VP *byl /budyet* [SC ~~XP1~~ XP2]]]

続いてロシア語の PE であるが、ロシア語のコピュラ文に出現する PE は指示代名詞である *eto*.SG.NEUT が不変化詞として用いられる。

(29) Mark Twain *eto* Samuel Clemens

Mark Twain PE Samuel Clemens.NOM

「マークトウェインはサミュエルクレメンズです」

(Geist 2008: 89)

(29)のような同一性文においては、PE である *eto* が XP1 と XP2 の間に義務的に出現する¹⁰⁾。しかしながら、(30)のような措定文や(31)のような指定文¹¹⁾においては PE とは共起しない¹²⁾。

(30) Mark Twain (**eto*) pisatel' po professii

Mark Twain (*PE) writer by profession

「マークトウェインは作家です」

(Geist 2008: 89)

⁷⁾ ロシア語の過去形は、性と数によって活用するので人称の一致は見られない。

⁸⁾ コピュラ動詞が現れる節の述語は具格で示されることが多いが、この具格・主格の交替は、措定文の述語名詞 / 形容詞で見られる (Geist 2008: 95)。

⁹⁾ ロシア語ではコピュラ *byti* だけが未来形を持ち、その他の不完了体動詞は〈*byti* の未来形 + 不定詞〉で未来を表現する。

¹⁰⁾ XP2 に固有名詞を有し、代名詞が主語として文頭に位置するコピュラ文の場合にも、PE が義務的に用いられる。

i) My *(*eto*) Marija i Ivan

We *(PE) Maria and Ivan

「私たちはマアリーとイヴァンです」

(Geist 2008: 95)

¹¹⁾ XP2 が文頭に移動した指定文においては、コピュラは基底構造の主語である XP1 と一致する。

i) Pričinoj avarii **byla /byli* neispravnye tormoza.

Reasons.SG.FINST of-accident was.SG.F/were.PL broken brakes.PL

「その事故の原因はブレーキの故障でした」

(Geist 2008: 95)

j) では、コピュラ *byli* が XP1 の複数という素性に一致している。

¹²⁾ ロシア語のコピュラ文の先行研究において、同定文を指定文として分類しているものが多いため同定文のデータに関しては確認できなかった。

- (31) Ubijca staruxi (*eto) Raskol'nikov.
 murderer of-old-lady (*PE) Raskolnikov
 「老婦人殺しの犯人はラスコーリニコフです」 (Geist 2008: 95)

このように、ロシア語の PE は同一性文でのみ出現するが、この場合、コピュラとの共起が可能である。

- (32) Ciceron eto byl Tullij /*Tulliem.
 Cicero PE was Tully_{NOM}/*Tully_{INST}.
 「キケロはタリーです」 (Geist 2008: 90)

(32)で示したように、PE とコピュラが共起する場合、XP2 は主格 *Tullij* として現れる。このことから、ロシア語の同一性文は、XP2 に主格を取るという制約があることになる。

ロシア語においてもアラビア語、ヘブライ語と同様に現在形のコピュラ文ではコピュラが明示されず、過去形・未来形ではコピュラが明示される。ロシア語のコピュラは、過去形と未来形で異なる活用を見せ、過去形のコピュラは XP1 の数・性との一致を示し、未来形のコピュラは XP1 の人称・数との一致を示す。ロシア語ではこのコピュラの有無によって述語の格に違いが見られ、コピュラが明示されない節の述語は主格で現れる一方で、コピュラが明示される節の述語は具格で現れる。このようなコピュラ文において、ロシア語の指示代名詞が不変化詞の PE として主語と述語の間に現れる。この PE は同一性文においては義務的に現れるが、措定文や指定文においては PE の出現は許容されず、PE がコピュラと共起する場合も同一性文においてのみ可能である。また、PE が同一性文においてコピュラと共起する場合、XP2 は具格ではなく主格を取る。

3.4. ポーランド語

ポーランド語には現在を示すコピュラ *jest* が存在する。

- (33) *Jesteśmy studentami.*
 are student_{INST}
 「私たちは学生です」

この場合、XP2 は具格として現れる¹³⁾。

¹³⁾ この現在形を示すコピュラ *jest* は省略することが可能であるが、その場合には、PE である *to* が義務的に用いられ、XP2 が主格として出現する。

- (36) Suchocka *to był* /**była* premier.
 Suchocka_{3.SG.F.NOM} PE be-past_{3.SG.M}/be-past_{3.SG.F} Prime Minister_{3.SG.M.NOM}
 「スチョッカは首相でした」 (Bondaruk 2012: 55)

(36)では、コピュラ *był* は、主語ではなく述語である *premier* の三人称・単数・男性と一致を示す。つまり、コピュラが PE と共起¹⁴⁾ する場合には主語ではなく述語と一致を示すということになる。

続いてポーランド語の PE の出現環境について見ていく。ポーランド語の PE は、基本的に全てのタイプのコピュラ文で現れることができる。

- (37) a. Jan (*to*) jest lekarz.
 Jan (PE) is doctor
 「ジャンは医者です」 [措定文] (Citko 2008: 273)
- b. Mój najlepszy przyjaciel *(*to*) (*jest*) Jan.
 my best friend *(PE) (is) Jan
 「私の親友がジャンです」 [指定文] (Citko 2008: 272)
- c. Tomiasto *(*to*) (*jest*) Boston.
 this town *(PE) (is) Boston
 「この街はボストンです」 [同定文] (Citko 2008: 272)
- d. Doktor Jekyll *(*to*) (*jest*) Mr Hyde.
 Doctor Jekyll *(PE) (is) Mr Hyde
 「ジキル博士はハイド氏です」 [同一性文] (Citko 2008: 272)

(37)で示したように、ポーランド語の PE は全てのタイプのコピュラ文に現れることができるが、非措定文（指定文・同定文・同一性文）においては義務的に現れ、措定文では任意的に現れる。

¹⁴⁾ ポーランド語においては、PE を伴う節において、一人称と二人称代名詞は主語になることができないという制限が見られる。

i) **Ja* /**ty to* dyrektor.
 I /you PE manager
 「私/あなたはマネージャーです」 (Bondaruk 2012: 56)

一方、三人称代名詞に関しては、PE の節の主語として容認される。

ii) *On to* dyrektor.
 he PE manager
 「彼はマネージャーです」 (Bondaruk 2012: 56)

このように、ポーランド語では、人称代名詞主語によって PE の出現に制限が見られる。

ポーランド語では、省略可能な現在形のコピュラと義務的に現れる過去形・未来形のコピュラが存在し、これらのコピュラは主語の人称・数・性との一致を示し、述語に具格を付与する。現在形のコピュラが省略される場合には、不変化詞の PE が義務的に用いられ、この節の述語の格は主格を取る。この PE はコピュラとの共起が可能であるが、この場合、コピュラの振る舞いに違いが見られる。PE がコピュラと共起する節の述語は主格で示され、コピュラは主語ではなく述語との一致を示すという特徴がある。最後に、ポーランド語の PE の出現環境について見たが、PE は全てのタイプのコピュラ文で出現可能とされ、措定文においては任意で現れ、非措定文の指定文、同定文、同一性文においては義務的に現れる。

4. 考察とまとめ

ここまで、アラビア語・ヘブライ語・ロシア語・ポーランド語におけるコピュラ文の構造と PE の出現環境の特徴を概観してきた。本節では、それぞれの言語に見られる特徴を比較・対照してみることにする。

まず、コピュラ文の統語構造は、基底構造として $[_{TP} [_{VP} (\text{Copula}) [_{SC} \text{XP1} \text{XP2}]]]$ という小節構造を持つと考えられる。明示的なコピュラが見られないアラビア語、ヘブライ語、ロシア語の現在形においては、この基底構造から XP1 が TP の指定部へ移動することにより VP が投射されない $[_{TP} \text{XP1} [_{SC} \text{XP+} \text{XP2}]]$ という構造としてスペルアウトする。この場合、小節主語と小節述語のみでコピュラ文が形成される。明示的なコピュラが出現する場合は、コピュラが VP に投射され、 $[_{TP} \text{XP1} [_{VP} \text{Copula} [_{SC} \text{XP+} \text{XP2}]]]$ という構造として表出する。この場合、VP 主要部に現れるコピュラは、TP 指定部に移動した XP1 と ϕ 素性において一致を示す。本稿で扱った言語におけるコピュラの有無をまとめたものが〈表 2〉である。

〈表 2：各言語におけるコピュラ〉

	セム語		スラブ語	
	アラビア語	ヘブライ語	ロシア語	ポーランド語
現在	×	×	×	○
過去	○	○	○	○
未来	○	○	○	○

また、本稿で見てきた格が表出する言語のコピュラ文において、コピュラが明示されない場合、XP2 はデフォルトの主格を取るが、コピュラが明示される場合は、コピュラが XP2 には対格（アラビア語）もしくは具格（ロシア語・ポーランド語）を付与する。これらを一般的に示すと(38)のようになる。

- (38) a. コピュラなし : [TP XP1.NOM [SC ~~XP1~~ XP2.NOM(default case)]]
 b. コピュラあり : [TP XP1.NOM [VP Copula [SC ~~XP1~~ XP2.ACC/INST]]]
-

コピュラが明示されないコピュラ文においては、(38a)で示したように、XP1 が TP に移動して主格を付与され、XP2 はデフォルトの主格で出現する。一方、コピュラが出現する(38b)においては、XP1 が TP に移動して主格が付与されると共に、コピュラが XP2 に対格・具格を付与する。

コピュラ文に出現する PE に関しては、アラビア語・ヘブライ語に見られるように一致を示す PE と、ロシア語・ポーランド語で見られる不変化詞としての PE の存在が確認できる。基本的にどちらの PE もコピュラとの共起が可能であるが、不変化詞として用いられる PE では、コピュラが共起する場合には、コピュラが明示されているにも関わらず述語の格が主格で示される。さらにポーランド語においては、コピュラは主語ではなく述語との一致を示す。他方、活用を示すセム語派の PE の出現は、コピュラの振る舞いに影響を及ぼさず、PE とコピュラが共起する節においてもコピュラは主語との一致を示し、述語も対格を取る。この PE が出現する場合の格についてまとめたものが〈表3〉となる。

〈表3：述語の格〉

	セム語		スラブ語	
	アラビア語	ヘブライ語	ロシア語	ポーランド語
PEのみ	主格	-	主格	主格
PE+Copula	対格	-	主格	主格

このようなことから、セム語派で見られた活用を示す PE と、スラブ語派で見られた不変化詞の PE とでは、異なる構造を有することが考えられるが、このことについては今後の課題としたい。

最後に、PE の出現環境について、それぞれの言語における PE の出現環境は〈表4〉のように示すことができる。

〈表4：コピュラ文のタイプによる PE の出現環境〉

	predication	specification	identity	identification
アラビア語	-	任意	義務	任意
ヘブライ語	任意	義務	義務	義務
ロシア語	-	-	義務	-
ポーランド語	任意	義務	義務	義務

〈表4〉で示したように、いずれの言語においても同一性文¹⁵⁾では、PEが義務的に現れる結果となった。また、措定文におけるPEの出現環境に着目してみると、ヘブライ語とポーランド語では措定文でのみ任意で現れ、アラビア語とロシア語においてはPEの出現が容認されないことから、PEは基本的に非措定文において現れる傾向があることが窺える¹⁶⁾。しかし、ロシア語においては指定文と同定文でもPEの出現が容認されず、この問題に関しては今後考えなければいけない課題である。

本稿で見てきた言語のコピュラ文は、[_{TP} [_{VP} (Copula) [_{sc} XP1 XP2]]]という共通の基底構造を有し、XP1がTP指定部に上がることによりコピュラとの一致を示す。このようなコピュラ文に出現するPEに関して、活用を示すPEと、不変化詞として用いるPEといった2種類のPEの存在について指摘した。また、活用を示すPEはコピュラの振る舞いに影響を及ぼさない一方で、不変化詞のPEはコピュラの格付与や一致現象に影響を及ぼすということも指摘できたように思われる。しかし、実際にPEが現れる要因やPEが有する機能に関しては、十分に考察ができなかったため今後の課題にしたい。

本稿ではアラビア語、ヘブライ語、ロシア語、ポーランド語のコピュラ文の特徴を概観し、PEがどのように現れるのかを見るだけに留まったが、今後は実際にコーパスなどを用いて、PEが現れる要因や機能について分析していきたいと考えている。

略号一覧

1 first person 一人称	2 second person 二人称	3 third person 三人称
ACC accusative 対格	COP copular コピュラ	DP determiner phrase 決定詞句
e empty 空	F feminine 女性	INST instrumental 具格
M masculine 男性	NEUT neutral 中性	NOM nominative 主格
NP noun phrase 名詞	PL plural 複数	PP prepositional phrase 前置詞句
PE pronominal element 代名詞要素	SG singular 単数	TP tense phrase 時制句
VP verb phrase 動詞句		

参考文献

- Adger, D. (2020) Rethinking the Syntax of Nominal Predication, *Syntactic Architecture and Its Consequences I*, 461–496.
- (2011) Clefted Situations: A Note on Expletives in Scottish Gaelic Clefts, *Formal Approaches to Celtic Linguistics*, 3–16.
- Adger, D., & Ramchand, G. (2003) Predication and Equation, *Linguistic Inquiry* 34(3), 325–359.

¹⁵⁾ 同一性文ではPEが義務的に現れるのかについて、多く学説で主語と述語の同一的関係の確立という機能をPEが担っているという考えが多くみられる (Iharbi 2017, Alotaibi 2018, Geist 2008)。

¹⁶⁾ このようなPEの出現環境は、コピュラと共起する場合にも同様の振る舞いを見せた。

- Alazzawie, A. (2016) An Agree-Based Account of Verbless Copula Sentences in Standard Arabic, *Ampersand* 3, 151–162.
- Alharbi, B. (2020) The Pronominal Element in Arabic Copular Clauses, *International Journal of English Linguistics* 10(4), 21–33.
- (2017) *The syntax of copular clauses in Arabic*, Doctoral dissertation, University of Wisconsin Milwaukee.
- Alotaibi, A. S. (2018) *The Copula in Arabic: Description and Analysis*, Doctoral dissertation, University of Essex).
- Amary, V. (2019) Copular Sentences and Binding Theory: The Case of French and Principle C, *Corela. Cognition, représentation, langage*, 17(1), 1–32.
- Baker, M. C., & Baker, M. C. (2003) *Lexical Categories: Verbs, Nouns and Adjectives* 102, Cambridge University Press.
- Benmamoun, E. (2008) Clause Structure and the Syntax of Verbless Sentences, *Current Studies in Linguistics Series* 45, 105–131.
- Bondaruk, A. (2012) Person Case Constraint effects in Polish Copular Constructions. *Acta Linguistica Hungarica*, 59(1–2), 49–84.
- Citko, B. (2008) Small Clauses Reconsidered: Not So Small and Not All Alike. *Lingua*, 118(3), 261–295.
- Camacho, J. (2013) *Null Subjects*. Cambridge University Press.
- Dalmi, G. (2010) *Copular Sentences, Predication and Cyclic Agree: A Comparative Syntactic Approach*. VDM Verlag Dr. Mueller.
- Danon, G. (2006) Caseless Nominals and the Projection of DP. *Natural Language & Linguistic Theory*, 24(4), 977.
- Doron, E. (1983) *Verbless Predicates in Hebrew*. Doctoral dissertation, University of Texas at Austin.
- Eid, M. (1983) The Copula Function of Pronouns. *Lingua*, 59(2–3), 197–207.
- Geist, L. (2008) Predication and Equation in Copular Sentences: Russian vs. English. In *Existence: Semantics and Syntax* Springer, Dordrecht. 79–105.
- Greenberg, Y. (2008) Predication and Equation in Hebrew (Nonpseudocleft) Copular Sentences. *Current Issues in Generative Hebrew Linguistics*, John Benjamins, 161–196.
- Haugereid, P., Melnik, N., & Wintner, S. (2013) Nonverbal Predicates in Modern Hebrew. In *Proceedings of the 20th International Conference on Head-Driven Phrase Structure Grammar, Freie Universität Berlin*, 69–89.
- Hawkins, R., & Towell, R. (2015) *French Grammar and Usage*. Routledge.
- Heggie, L. (1988) *The Syntax of Copular Structures*. Doctoral dissertation.
- Heller, D. (2002) On the Relation of Connectivity and Specificational Pseudoclefts. *Natural Language Semantics*, 10(4), 243–284.
- Higgins, F. R. (1973) *The Pseudo-Cleft Construction in English*. New York: Garland.
- Markman, V. (2008) Pronominal Copula Constructions are What? Reduced Specificational Pseudo-Clefts. In *Proceedings of the 26th West Coast Conference on Formal Linguistics* 26, 366–374.
- Rutkowski, P. (2006) From Demonstratives to Copulas: A Cross-Linguistic Perspective and the Case of Polish. *Journal of Universal Language*, 7 (2), 147–175.
- Shirtz, I. S. (2014) *The Syntax of Non-verbal Predication in Modern Hebrew: Predicate Nominals, Pseudoclefts and Clefts*. Doctoral dissertation, Hebrew University of Jerusalem.
- Shlonsky, U., & Rizzi, L. (2018) Criterial Freezing in Small Clauses and the Cartography of Copular Constructions. In *Freezing*, De Gruyter Mouton, 29–65.
- 上野貴史 (2020) 「名詞述語文の小節構造分析：英語・イタリア語・フランス語の場合」, 『ニダバ』 49, 11–20.
- 竹田敏之 (2013) 『アラビア語表現とことんトレーニング』, 白水社.
- 八木久美子, 青山弘之, & エベード, イハープ・アフマド. (2013) 『大学のアラビア語詳解文法』, 東京外国語大学出版会.